

名誉館長館話実施報告抄

新野 直吉*

二木 謙三・澤木 隆子・黒澤 三一・島田 五空・斎藤 寅次郎・田口 掬汀

はじめに

平成22年度は、「先覚記念室」と「菅江真澄資料センター」に関する館話をそれぞれ6回ずつ実施した。これまでの通り、その中から先覚についての5月14日(金)二木謙三・5月28日(金)澤木隆子・6月11日(金)黒澤三一・7月2日(金)島田五空・7月16日(金)斎藤寅次郎・7月30日(金)田口掬汀の6回分を「名誉館長館話実施報告抄」として載せる。

二木 謙三

明治6年(1873)1月10日、秋田町土手長町(現千秋明德町)の元御典医樋口順泰次男俊蔵として今で言えば秋田中央警察署のあたりに誕生した。母はエイ、3歳上の兄と2歳上の姉がいた。その故か戸籍係が謙三と文字を誤記してしまったのだという。父は江戸で浅田宗伯の塾で学び塾頭だったという秀才で、明治維新後町医者になってからも貧しい患者には薬だけではなく食物も与えたと伝えられる。そして謙三自身「謹しむ」の文字を名にするから謙虚が大切と娘に語ったという。

土崎に住む二木家は甲州から出て土崎には船で来たという代々の医者で、跡継がない場合は互に養嗣を交わす約束を樋口家と交わした仲の親類であった。それに従って彼は養子になったが、二木家はもう養母キヨの一人暮らしで医師業ではなく、4歳か5歳の短期間は養母の許で暮らしたらしいが、生家が恋しくて、土崎から秋田の方に行く魚屋の後について生母の処に戻ってしまったという。

12歳で戸籍上は二木家に入り、その年家督相続して二木家の戸主になったが、その新戸籍は生家と同じ番地に設定され、やがて養母は北海道に渡り大正9年に小樽で亡くなるので、実生活を母子

として過ごした訳ではなかった。

習字は、5歳から漢学塾で学び、9歳で小学校に入学する。「仰高等学校」であったと考えられているが、翌16年(1883)明德小学校が建設されるのでそこに学んだと考えられている。明治21年(1888)5月秋田県立尋常中学校に入学する。幼児期からの病弱が続いた。小柄で湿疹や胃腸弱、急性腎臓炎もしばしば患ったうえ痔まで経験したといい、父もこの子が20歳まで生きられるかを心配したという。

だが勉強好きで真面目、当時流行のストライキにも独り参加せず、五年生(最上級生)の時にはストライキが激化する様相の時に、師弟の道を説き大演説をして押え、一年生だった深味貞治医師に「偉い人」と感じさせた雄弁家でもあった。26年(1893)3月25日中学を6期生25人の一人として卒業。20歳の徴兵検査では不合格で検査官に「麦飯を食せ」と言われ、健康と食事の関係を痛感することになる。

26年9月仙台の高等中学校に推薦入学する。猛勉強の度が過ぎ神経衰弱になるが座禅などで克服し好成績を得た。27年の国の学制改革で仙台の第二高等学校には彼の志望の医科がなく、そのある山口高等学校に転入ということになる。

下宿生活は上級生も同宿で夜食の焼芋買いなども命ぜられた。日清戦争にも無関心で勉強専一の彼は28年春に下宿を脱出し、当時38歳で教頭の北条時敬(ときゆき)家に書生となり住みこむ。賢夫人薛(まさき)の影響も受ける。時敬は安政5年(1858)生まれの金沢人で、山口高のストライキ収拾のため一高の教員から、文部省参事官と兼務の岡田良平校長と共に山口高の教頭に発令されて任を果たし、翌年校長に昇格した。そこに同様書生として住み込んで来た級友吉本清太郎と親

*秋田県立博物館

交を結ぶ。

時敬は教え子の一人である西田幾太郎が、先生は計り知れない「大きい山」の感じだと述べたというが、四高校長・広島高師初代校長・東北帝大総長・学習院院長・貴族院議員と進む。薛夫人は現時でいう「イケメン」でもない時敬を敬愛して結婚した金沢の武家娘で、家長の役を代行した内助の功が評価されている。二木は朝の邸内掃除、放課後の草むしりから犬の世話とよく働き、人々の睡っている夜中集中的に勉学した。井戸に落ちた女中を、女性たちの帯を借りて繋ぎ我が身を縛って降り抱え上げて助けたこともあり、山口高の生活を終えて上京する際、行李一杯の雑巾を夫人に捧げ驚きの声をあげさせたという。努力して体を鍛えた謙三は、全校遠足の折に、往途の大型船が帰途小型に変わり、50人が40キロ走って帰ることになった際にも、独自の腹式呼吸法を既に修得しておりトップになって戻ったという。

30年(1897)卒業して東京帝大に進学するが、北条の紹介で牛込若宮町の織田小覚邸に書生として住むことになる。24歳であった。織田は北条の友人で金沢の士族で、加賀前田氏の教育係で国漢学に通じ、その蔵書は二木の研究にプラスになった。また織田邸から渡廊下で後に総理や枢密院議長の要職に就く平沼騏一郎邸に通じていた。他にも多くの要人達と織田を通じて知り合った。

帝大の洋方医学一辺倒の講義は、漢方医学を評価する二木には冷淡に対応せざる得ないところがあった。学友には秋田中学と一緒に卒業した遠山景精がおり、26年の卒業証書番号が平民二木22号、士族遠山24号という関係であった。そして二木は景精の妹で弥三郎長女のキヨに恋をする。

明治34年(1901)9月東大を卒業し助手となるが、在学中の前年10月5日に母エイが世を去っていた。53歳だった。12月伝染病専門の東京市立駒込病院に勤務する。そして小柄の体にカイゼル髭を蓄えるのである。月給50円だったというから初めて同病院採用の医学士としての自尊心もあったのであろう。当時巡査の月給は10円だったというからである。35年春にキヨ改めイヨと結婚、牛込若宮町の織田家の二階で新婚生活を始める。キヨは養母の名だったのでイヨに改めたので

あるという。間もなく徒歩で十数分という本郷浅草町の一軒家に転居した。独身の小覚に遠慮が生じたのであろう。診療と研究に没頭の亭主関白ぶりであり、妻女はまさしく武家の妻であった。36年6月8日入籍し、11月18日に長男順益（よります：織田命名）が誕生した。

38年(1905)からドイツに留学する。ミュンヘン大学グローバル教授のもと細菌学の研究に従事する。41年(1908)までの勉学は、すべて私費で父樋口順泰の援助によって支えられたという。免疫学の研究にも勉めた。グローバル教授と連名の論文「白血球の喰燼作用、ロイキン及びプラキンの殺菌作用」を発表し、優れた業績で後で記す通り帰国後に学位論文として博士号を取得する。

コレラについては、明治16年に東大卒業の北里柴三郎がドイツに留学しコレラ菌発見のコッホに師事し自らも22年に破傷風菌の培養に成功し、細菌学者として有名であった。明治35年6月下旬に駒込病院に運び込まれた竹内なる患者が死亡した件で、やはりコッホ菌であるコレラの菌を自分の北里伝染病研究所で分離したと発表した。コレラはコッホ菌のみとする北里の立場では自然の結論であった。ところが内務省中央衛生会では別種のコレラ菌を検出し発表した。両者の論争は学術論から感情論にまで至った。結論を出したのは36年に発表された二木論文であった。

彼は従来の馬の免疫血清を用いる細菌鑑別ではコッホのコレラ菌も竹内の病菌も区別ができないとして、兎の免疫血清を用いる検査法で明確に分別した。コレラ病菌多種説を提起したのである。続発したコレラ罹病者の検査に基づき、その折のコレラ患者は竹内菌に依るものであったことが明らかになった。この多種菌説はその後の赤痢や脳炎の研究についても、益するところが多大であった。

赤痢については、仙台出身の志賀潔（本姓佐藤だったが母方の志賀氏を嗣ぐ）が、北里伝染病研究所助手として明治31年に「志賀菌」と呼ばれた病原菌を発見した。3年後にはドイツに留学し後年北里研究所部長・慶応大学教授を経て、京城帝大初代医学部長、続いて総長を務めるが、この赤痢菌についても二木は、毎晩夜更けまで研究生

活を続ける中で、複数種の存在を迫及し、駒込病院の患者から、36年「駒込A菌・駒込B菌」を発見した。しかし「二木菌」の名称は生じなかった。

漢方医学を尊重する心情が強かった二木が、敢えて渡欧しそれも私費でドイツ留学を実行したのには、世界に通用するためにはく学和漢洋を兼ねる必要があると、心に期するものがあったのであろうと私考する。睡眠は毎日2時間という研究専一の生活で新発見が続き、「面白くて仕方がなかった」と自著書で述べる留学を終え、イスラエル・エジプトなどの旅もして、ドイツ製高級顕微鏡を携え、シベリア鉄道経由で明治41年(1908)4月に帰朝した。3年前の4月15日横浜で見送った妻と長男とは生家の樋口家で生活していたが、東京に戻り神田小川町に家を持った。5月には駒込病院に復帰、42年4月新設の副院長になる。

6月には東大の講師にも就任し、10月18日付で医学博士の学位を受領する。彼の「自然免疫学理の研究」の提出論文に浜尾東大総長(東大生え抜きの教育学者)からグローバルとの共著との問題点指摘もあったが、グローバルその人が実際には二木の単独の研究成果だと証明していたので、先に「赤痢菌の研究」「コレラ菌の研究」の価値ある副論文の提出もあり、立派な学位受領となった。大学での伝染病・細菌学・保健学の講義すべてが受講者に人気があったという。雄弁も作用したのであろう。

明治43年(1910)11月16日に生まれた次男順福(よりふく)は1歳4ヵ月で夭折したが、44年5月には秋田県医師会のために帰郷して「チフス菌の生存期間」の講演もしている。大正元年(1912)8月19日には長女ミチが誕生した。やがて15年にミチは織田小覚の養子となり、昭和6年(1931)には石川出身の増田定吉と結婚する。夫は後年フィリピンで戦死する。また三男の順好(よりよし)は大正3年11月4日に生まれたが6歳で夭折した。5年(1916)4月8日父順泰が72歳で逝去した。生家の跡継ぎの甥(兄の三男)が幼く、葬儀は二木によって天徳寺で行われ、正洞院が菩提寺だったので平田篤胤墓地の近くに葬られた。

大正3年には2月に東京歯科医学専門学校講師兼任、12月東大助教授に昇任、8年4月日本女子

大学講師兼任、9年4月実践女子専門学校講師兼任と教育界でも活躍、10年2月には東大教授になった。他にも日本医科大学教授、東京看護婦学校長、東京府立第五高等女学校講師なども兼務していた。勿論東京の駒込病院では副院長から院長、伝染病研究所技師(後に附属病院長)などの職責も果たしていた。早朝出勤で帰宅は未明という精勤ぶりであった。

駒込病院長就任は大正8年(1919)8月1日で、彼の佳き上司宮本叔院長(東大教授)がインフルエンザ後遺症により7月30日に辞任したことに依る。この間家庭では6年(1917)10月31日に末子の二女アツが生まれる。昭和15年(1940)姉の夫定吉の弟の増田友吉と結婚し、この夫婦が二木家を継ぐことになる。昭和7年1月4日頭の良い長男順益が28歳で亡くなったからである。院長の家に年始に訪れた病院職員の酒宴の時に別室で息子の臨終に立ち会ったという。二木の院長の任は5代目で12年間に及ぶのである。そしてこの激務の間も昭和10年代前半は一日一食主義であったが、普通人は「二食」がよいと言っていたという。自分も忙しきで三食が二食になり、その方が体の調子を良くしていると語ったら、「それなら一食の方がいいだろう」という言辭も出てきて、それに敢然と挑戦したのだという。一食をやめたのは81歳になった昭和29年名古屋で開かれた日本伝染病学会総会席上での宣言であった。

玄米によるこのような「正食」、腹式呼吸法による「正息」、そして正しい姿勢の「正姿」がモットーであった。共鳴する向きも多く、玄米食は海外でも支持者が少なくなかった。いうまでもなく災害にも遭った。大正の関東大震災では、伝染病研究所附属病院・駒込病院はまあまあだったが本所病院は類焼し患者避難で大被害だったし、二木家は焼失して伝家の宝物も灰となった。駒込病院で数日を過ごしたのち、主治医をしている前田侯爵邸内の家屋で1年間の仮住いをした。この大正12年からは二十余年経っているが、第二次大戦の戦災でも家が焼失した。あのドイツから求め帰国した愛用の顕微鏡も戦災で失った。

勿論栄誉についても昭和4年(1929)学士院賞を受賞しているし、7年には『古史読本』なる著

書を編んだ。いかにも「食養法」で衛生復古財政復古民性復古の「三復古」を唱えた人らしく、国漢学の素養は専門的領域に達していたのである。翌昭和8年(1933)3月東京帝大教授は定年となるが、牛込高等女学校という大正13年2月13日設立の学校の経営に参加することとなる。そして昭和15年には四代目校長、三代目理事長の任に就くのである。それは第二次大戦後にまで繋がって名門高校の運営を展開していく。

大正15年9月に設立の「日本伝染病学会」の運営も戦後まで続く活躍の場である。東大法医学教室で開かれ、2503人が参加した設立総会で初代会長に選ばれ、昭和23年(1948)の第22回総会で名誉会長になるまで22年間も職務を遂行した。学会では常に座長の任にあり、秀れた研究には二木賞を出して後進を励ました。

第二次大戦も激化した昭和18年(1943)2月24日イヨ夫人が急性肺炎で逝去した。玄米食の会を開く準備の買い出しの日の寒さで風邪を引いたことが原因で63歳だった。その衝撃か4日後夫人の父遠山弥三郎が85歳で亡くなった。二木は70歳で「最高の妻」といわれる伴侶を失ったのである。前年3月豊島区日出町3丁目に牛込の借用校地と別に学校用地を買収、ここに昭和20年5月25日の空襲で全焼した学校を建築することになる。

焼失の翌月には、仮校舎を建て、22年(1947)4月中学校設置、23年3月女子高校設置、10月には「豊島岡女子学園中学校・高等学校」となり、31年(1956)7月から校舎全面改築が行われる。戦後変動も切抜け日本の発展期を迎えた37年(1962)12月に二木は学園長となり、4代目の理事長望月一二と5代目校長二木友吉に任せるが、校長であった期間は毎朝全校生徒に訓話という教育熱心さであった。35年(1960)には二木賞を設けて中学・高校の各学年に年2回の学業優秀者(2名)表彰を行った。校長職は友吉から40年後孫の謙一國學院大學教授に引継がれた。

昭和26年(1951)10月には研究者の選ばれし者たる「日本学士院会員」になり、29年には5月3日教育功勞により藍綬褒章を受けるなどの榮譽に輝いたが、昭和30年(1955)つい先年まで秋田

県人では唯一の栄光であった、文化勲章の受章があった。受章者6人中最高年長82歳で前列中央に腰をかける皇居庭での写真には、御自慢だったというカイゼル髭がない。此の年に迎えた亡妻十三回忌の法要の前に剃り落したのだという。受章には非常に満足していたという。不思議な気もするが私はこの報道を秋田に来任した3年目に体験した訳だが、少なくとも昭和15年位の中学生時代から、著名な玄米飯の咀嚼や腹式呼吸の二木博士が偉い人だと認識していたのに、博士が秋田出身だということに気がついていなかったのである。この受章が豊島岡女子学園の教育や学習に一層大きな力を附与したに違いないと確信する。

戦後の活躍の中で医学者の枠の中には止まらない活動に修養団団長がある。「財団法人修養団」は明治39年2月に、東京府師範学校生蓮沼門三が樹立し大正時代に全国的に展開されて、研修会・講習会も行われた。初代田尻稲次郎子爵・2代平沼騏一郎枢密顧問官の後を享けて、終戦後に戦時的国粹化を是正しGHQから継続を認可させるための改善の役を担って昭和21年6月第3代団長となった。既に大正11年に理事、昭和12年には団附属の汗愛病院の院長にもなっていたので、大正から戦時の昭和まで全国各地はもとより、中国大陸や台湾にまで講演などに赴いていたのであり、改善にも熱意を示し、20年間もその任に在った。彼が92歳で辞任後は団長ではなく理事長制になったという。

昭和41年(1966)3月25日に風邪を引いて、秋田中学後輩で教え子の今野亀之助東大助教授らの看病を得たが、肺炎になったりもして入院も長引き、4月20日勲一等瑞宝章叙勲の歡びに包まれた後に、27日朝逝去する。行年94歳で従三位を追贈される。5月7日豊島岡女子学園での葬儀には数千人の会葬者があった。土崎の明称寺に埋葬されるが、昭和55年7月東京福生の西多摩霊園墓地に移転改葬された。

澤木 隆子

明治40年(1907)9月6日南秋田郡船川港(こう)町大字船川に、再吉・キエ四女のタカ誕生。父は祖父母晨吉・タキの次男だが長男早世のため

事実上の長男。父の弟は三男淳吉、四男堅吉、五男四方吉である。祖父晨吉は慶応義塾に学び明治30年1月澤木銀行を開き、船川村長から継続していた町長を辞していた。彼は長命であったが、美人の名ある妻タキは明治34年(1901)39歳で世を去った。そしてこの美はタカにも伝えられていた。

詩人澤木隆子の存在は秋田に住む者として当然知っていたが、お目にかかったことはなかった。ところが昭和59年の初めに印刷物で詩人の若い日の写真を発見、たまたま「秋田美人」についての本を書いていたので、書中に使用する許可を求めたのであった。快く応じられその後文通の機会に幾度か恵まれたのである。

大正3年(1914)4月船川小学校入学、当然順調で優秀な学校生活を続けたものと考えられる。9年3月に小学校を卒業し、4月秋田県立秋田高等女学校に入学する。寄宿舎生活を送ることになる。祖父晨吉は画家になることを期待して「秋芳」の画師雅号を持たせていたというのが、本人は詩作に励むようになり、『白鳩』を愛読、独学習練の結果上達し、投書しては皆入選の成績で、白秋への傾倒から朔太郎や犀星に拡がっていく。

13年(1924)3月秋田高等女学校を卒業する。上京して4月麴町の千代田女学校専攻科文科に入学する。秋田高女時代からキリスト教会に通っていたという。懂れていたのだという。ところで千代田女学校は浄土真宗系列の学校で、キリスト教とは関係ないが、九條武子が名誉校長であり、有島武郎も教師に名を連ねていたことに魅力があったのだという。だが森雅之(有島行光)の父であり、有島生馬・里見弴の兄でもある有島は、12年6月9日に富裕層に生まれたインテリの、社会主義にも共感したらしい矛盾感からであろうか、軽井沢の別荘で人妻の波多野秋子と情死してしまう。若い女学生としてもその情報は持って入学したであろうが、「有島武郎自殺後の入学で失望した」と『年譜』(詩碑建設記念誌『杉』昭和49年5月)には記されている。

経文を読誦する寮生活を、学校の性格上経験していたが、若月紫蘭の古典授業に関心を深めたという。それなりに級友もでき、都会生活に馴染んだのであろう。翌14年4月に学友達と東洋大学

の聴講生となり、支那哲学東洋文学科で学ぶことになった。キリスト教にも関心を持つのは明治の開明性豊かな人士によく見られた傾向であるが、九條武子は大谷光尊次女という西本願寺の宗女の娘に生まれ、明治42年男爵九條良致と結婚して欧州に渡る。1年余で単身帰国し、夫の帰朝を待ちながら十余年間仏教婦人会長などとして社会慈善に励むと共に佐々木信綱に師事、竹柏会所属の女流歌人として活躍する。この才貌兼備の九條武子をふり仰いだことが、隆子が仏教や詩歌の道に励む刺戟になったことは疑いがない。

東洋大学では藤村作や久松潜一という、やがて東大教授になる国文学者の講義を受け充実した勉強をしたという。千代田女学校専攻科の学友が何人か東洋大学に入った中で広田美子と巢鴨の下宿で同室生活し、『日本詩人』に初投稿。当初「民衆詩」派だった佐藤惣之助選者により「平行線」や「唇」が入選し、新進詩人欄に推薦されるのである。

東洋大学詩人協会に入会し同志たちと作詩活動を卒業まで続けるが、『日本詩人』が解散し投書による作詩活動に区切りをつけ、佐藤の誘いを受け惣之助門下になったという。『白山詩人』の合評会などで多くの詩人と知り合う。その中から後に述べる山本和夫という『白山詩人』の同窓で大正14年(1925)以来の友と、昭和2年(1927)に知り合った第一高等学校生島村秋人という友について紹介する。先ず島村関係のことを述べる。

大正末に隆子は先の広田美子と共に江戸川高台の「久世山ハウス」で自炊生活をしていていたが、昭和2年に男鹿の生家澤木氏が、隆子の叔父四方吉教授の病弱を慮りその近くに住みたいという家族愛から田園調布に東京宅を建てたので、其処から通学するようになっていた。その年に一高の文芸部員と知り合い、雑誌交換などの中で島村を紹介されたというのである。島村の父抱月は大正7年にスペイン風邪で急死するまでの5年程の間、松井須磨子(本名小林正子)との芸術座新劇活動に没頭していた筈なので、抱月の末子という秋人は、幼少期における著名文芸人・早稲田大学教授としての父の許での家庭生活から、師坪内逍遙門下の須磨子と相愛になり、大学も師も家庭も捨てた父と離れての思春期生活となったことの差から、

きっと特殊な生活思想を形成していたと認められる。そのことは定めし新鮮異質の刺戟を地方良家出身のお嬢様女子学生に与えたに違いない。周知の如く須磨子は2ヵ月後に後追い自殺をした。それも愛憎は別として、少年の心に影響を与えたことであろう。

激しい左翼的作品を書いていたという島村秋人は、ロマンチストのお嬢さん澤木を「ロム」と呼んだ。文献には「からかいの意」と説かれているが、島村の経歴から考えれば少し拵った「愛称」だったと思われる。澤木が東洋大学を正規卒業した昭和4年(1929)に、島村秋人は「ROMへ」という詩一篇を残し「ナゾの自殺」をした。若い女性詩人の受けた衝撃の大きさは察するに難くない。『杉』の『年譜』には「このショックで生活観がぐらつき」と当時の事態を表現している。

暫くは無感動でタイピスト学校・仏語学院・料理講習会・生花教室などを「涉り歩き」、「築地小劇場に通うことが支え」だったというが、翌5年に経済学の慶応大学教授滝本誠一博士の助手となり、著述の清書や校正などに励み、更に家では弟妹の家庭学習を指導し、父母の信頼を得て自身の本来に戻った。この年11月7日には四方吉叔父が数え年45歳で逝去。満では未だ43歳の若さだった。隆子は数え年25で同じく72歳の祖父と共に鎌倉の叔父邸に駆けつけて悲しんだ。

だが6年には悲しみを乗り越えて詩人としての画期的出版をする。即ち処女詩集『ROM』の刊行で、学友山本和夫の編輯で紅玉堂発行、序文は惣之助、跋文は学友村松千枝、後記には作者本人の超豪華本で、急激に詩人としての名が高くなった。原稿依頼が続き交際も広まり、シュルレアリスム系に近く、独自の「知的新抒情詩」なる詩風の構築に向かったという。

昭和7年(1932)坂崎成敏判事と結婚、大森に新居を営む。前年にも各方面に対して執筆に応じ、翌年にも「秋の伝説」を『婦人公論』に発表している。そして『文芸』に詩5篇を発表した9年には長男成尚(しげひさ)が誕生する。だが翌10年には夫の転勤で広島に移住して東京を離れることになる。この年には『ごろっちょ』の同人となった。

この『ごろっちょ』詩社から昭和11年に『石の頬』を出版した。ところがこの第二詩集は豪華本の処女詩集『ROM』とは異なり、装丁も著者の手になる普及版仕立てだった。それは第一集の豪華さ故に有名になったことに鑑み、簡素な装丁の本で中身の詩作品そのものの価値による詩人としての自身の挑戦を試みたものだという。卓抜した女流詩人の純粹さが窺える。この年8月愛する祖父晨吉の逝去があり、東京と故郷における葬儀に出席した。『ごろっちょ』12月号は『石の頬』特集号で、名のある詩人数多の読後評を載せ、好評が多かったので自信を深めたという。

昭和12年(1937)8月長女彰(あや)が誕生し家族も増え、翌13年1月広島から松本に判事の転任により移る。日中間の戦争は12年から始まっていたが、戦時下という緊張はあるものの差迫った社会情勢では未だなかった。14年4月9日母キエが東京で逝去、11月には妹麗子が亡くなるという悲しみが続いたが、16年(1941)には深尾須磨子を会長とする「全日本女詩人協会」が発足、その会員となった。深尾は大正10年夫の遺稿詩集『天の鍵』に54篇の自分の詩を附載出版し、詩人の世界に登場、大正14年から昭和16年までフランスなどに外遊していた。

16年にはもう一つ次男成昌(しげまさ)が誕生するという母としての充実もあった。そのことと関連するかのようになつた女詩人協会の出版するアンソロジー(詞華集)『母の詩』に作品を発表する。17年にも世は既に太平洋戦争になっていたが、『女流詩人集』に作品を出す。また18年にもアンソロジー『海の詩』に作品を出した。

だが世は大戦末期の空爆被害期に入り、窮迫し詩壇の活動も休止状態になってしまう。そしてその18年に夫の転勤に従って松本から北海道旭川に転居することになる。このあたりのことについて、詩誌『舩』31号の「追悼澤木隆子特集」(1993年5月10日発行、編集人成田隆平・発行人近藤彰)所収の殿内芳樹「清冽と幽寂澤木隆子さんのこと」の文中に、「私は学業を終えてから、新聞記者をしたり教員になったり、中国大陸で生活したりしたあげく、終戦のころ松本郊外浅間温泉在住の詩人高橋玄一郎が、『松本には澤木隆子という女流

がいて、いい詩をかいていた。いまは他県へ移って淋しくなった』ということ告げた。」という段落がある。詩人仲間澤木の評価の高さがわかる。

さらに松江に移っていたが、戦後混乱の中で、昭和21年(1946)3月松江から秋田に転任、船川に帰郷する。これから詩人の故郷船川に本拠をおいての活動が始まるのである。『新詩人』の発刊があり作品を出す。22年頃から随筆を『秋田魁新報』文化欄に発表するようになる。その反応と関係するところもあるのであろう、23年頃から秋田の詩人たちとの交流が始まる。

昭和25年(1950)「全日本女詩人協会」が「日本女詩人会」と改称、新しい時代の機関誌が『女性詩』となりそれに参加する。だがこの年の9月9日に父再吉の逝去という悲しみにも遭遇した。第一詩集や第二詩集の生まれた社会とは全く異なる戦後世情も次第に平情化し、文学界にも戦前と通観しての鑑賞や評価が行われ出した。『日本現代史大系』(河出書房)9巻に『ROM』『石の類』から作品が集録され広く紹介された。

当然地元でも認識は深まり評価は高まった。27年(1952)4月には秋田の詩人たちと詩誌『ハンイ』を発行、同人となり発行人となる。中央の斯界からも好評だったという。そして画期的なことが起こった。この年11月地元の県立船川水産高等学校の専任講師として勤務したのである。国語科を担当した。漢文が教材にあったとすれば正に特別の力を発揮したことであろう。この頃からNHKラジオの朝の番組で度々随想などが放送された。

前年もアンソロジー『女性詩選集』に作品を発表していたが、29年、アンソロジー『星宴』にも参加する。NHKラジオの詩と随想の選者となり、以後長年続ける。子供の時間に放送劇「鷹の子」を書き放送される。昭和33年(1958)3月29日にも執筆したNHK児童劇「佐保姫まんじゅう」が放送。作詩の方でもこの年9月に第三詩集『迂魚の池』(ユリイカ)を出版した。

昭和34年(1959)総合の詩誌である『ユリイカ』へ「わが町男鹿」なる随筆が掲載される。『婦人画報』2月号には「男鹿の詩」を発表する。そして35年3月2日には詩集『男鹿の子供』がNHK

で放送される。「男鹿の〇〇」なる諸作品が世に問われていることは、男鹿の為、秋田の為にラジオの放送文化が詩人の才能と愛郷心によって明確に顕示されていたことを示している。

昭和37年のことである。10年に及んだ船川水産高校の教職を退いた。どうしたのかと思うが、入院して医療を受ける必要が生じていたのである。それでも「さきがけ詩壇」の選者となりその後長く続け、38年には男鹿演劇グループ「ふきのとう」の人々と地域性の顕著な活動を続け、愛郷詩人の本領を発揮し続ける。しかし11月11日夫成敏逝去の悲しみに直面する。詩人は夫を出身地熊本の坂崎家菩提寺正立寺の墓地に埋葬する。

昭和39年(1964)秋から9ヵ月程の保戸野所在内科医院への入院があった。詩人はその間もNHKの選者や魁新報の選者の任は果たし続けた。しかし限界もある。発行人であった『ハンイ』などが何時とはなしに消えてゆく事実もあった。よくあることとはいえ、やはり同人誌は必要である。40年に畠山義郎の主導で新しい同人誌が、奥山潤編集の『密造者』として刊行される。畠山は行政で広く知られている。奥山は考古学研究者でもあった。共に県北の詩人である。隆子は同人になった。でもこれも長くは続かず42年に終わった。

40年2月随筆「大謀網と竜神」(経済往来)、41年詩「キリタンポ」(婦人画報)など風土性豊かな作品を世に問い、41年には県公報誌『あきた』8月号に「澤木四方吉」という名文を「人・その思想と生涯」の欄に執筆する。翌42年詩誌『七人の会』が発刊され同人となる。

44年(1969)7月21日にはアポロ11号が月に到ったが、それについての作詩をABS秋田放送から注文された。流石名詩人、応えて長詩の「月がすぐそこに」なるファンタジック・モンタージュを創作、第一部・第二部に分けて生放送で朗読する。45年9月には県内女流詩人間に交流が薄く作品も残らないことを憂い、アンソロジー『秋田詩花』なる、この時代の秋田県女性詩人作品集を編集発行した。1ヶ月後の10月には詩と版画で構成される『漁村の短冊』(秋田文化出版社)を世に問う。画は大島郁太郎で豪華な本で評価を受ける。このような動きの中で、県詩界第一人者には

昭和四十五年度秋田県文化功労者の表彰という栄光が加わった。11月3日文化の日の受章に男鹿市からも祝賀を受け、秋田詩祭でも祝賀を受けた。

46年に男鹿市芸文協発足に伴い顧問になる。翌47年男鹿詩話会発足、その主宰となる。同年3月には『男鹿叙情詩選』（秋田文化出版社）の編集と解説に当たる。県内外詩人の男鹿を謳った詩の全集で、表紙絵や挿絵は「きり絵」の安藤ひろしの手による佳装であった。

昭和47年11月1日に『舩』創刊号が出版された。本誌は男鹿詩話会の機関誌で、同人でもある澤木詩人が編集発行人であった。同人の中には娘の彰も入っている。48年3月1日には第二号が、12月1日には同誌第三号が発行された。この年4月には『秋田人物風土記』（昭和書院）に「澤木四方吉」を載せる。『あきた』七月号には「男鹿の民話と詩情」を寄稿している。

このような充実した活動に男鹿市教育委員会表彰が行われ、更に翌49年(1974)には男鹿市制施行二十周年記念式典で男鹿市からの表彰を受けることになる。記念して「澤木隆子詩碑」建設が行われ、男鹿市社会教育課内の澤木隆子詩碑建設実行委員会では、記念誌『杉』を5月26日に刊行した。該誌には詩人の『年譜』が掲載されていて、本館話でも貴重な資料とした。

昭和51年(1976)9月随想集『男鹿物語』、翌52年10月に詩と写真集の『交響男鹿』や詩集『今いるところで』、翌53年8月に随想集『男鹿だより-いなかの竜-』など精力的な活動を続け、56年2月には詩集『三角幻想』を出す。この昭和56年に関わり注目すべき話題資料がある。

初めの方でも少し触れた『白山詩人』の友で、『ROM』の編集に当たった山本和夫についてのことである。既に述べた詩誌『舩』の31号「追悼澤木隆子特集」(1993〈平成5〉年5月10日発行、編集人成田隆平・発行人近藤彰)に「澤木隆子を想う」という山本の文章がある。「並んだり、後になったり、先になったり。澤木と私の足あととは、『白山詩人』にはじまり、『森』で終わっている」と書き出すが、その詩誌『森』がこの昭和56年創刊なのである。

東洋大学の学生同人誌『白山詩人』について

「創刊は大正十五年七月である。……指を折ると、六十八年前である。……ぼろぼろの思い出になった。でも、あの頃、二人はびちびちしていたんだらうな。ぼやけた向うで、なつかしい二人だ」と書き、『森』は「半世紀後、昭和五十六年三月の創刊である。編集は、詩集『沙羅の木のように』の花村奨だった。……隔月にきちんと発行し、六十号まで、すくすくと伸びたが、残念名編集長は、一九九二年十月三十日に昇天」したのでそこで終刊となったことを述べる。

それから山本は「その頃の大学は木造で、校庭に、柿の木が一本……柿の木蔭(こかげ)で語り合った。そんな、なつかしい思い出がある。私たちは、ノンセックスで、男性女性の区別を無視した。(同人の白井一二はこれを童子童女の友愛といった)澤木隆子は、澤木!と呼んだ。隆子さんと呼べば、女性になるから。……いつの間にか、大の仲よしになった。童子童女の友愛といっても、ライバルとしての競争から、ねたみだとか、やきもちだとかの雑音が、鳴り響きがちである。ところが、二人の間には、雑音が響かなかった。二人は、おたがいに、……やさしく尊敬し合っていた。」と書いている。詩人らしい要点描写の表現である。

さらに「私のふるさと出身の歌人、山川登美子と澤木をダブらせて考えるようになった。……賞めたくなる彼女の作品を見つけると、電話で呼び出し、校庭の柿の木の木蔭で、語り合った」とも書き、『森』誌の時代になつては「東京と男鹿の距離は遠い。それで手紙ということになった。……私と澤木との友情は『日本海を流れる対馬暖流てう友情さ』ということになる」と定義している。

続いて「私と澤木の生きる道は、六十八年間、平行して走っていた」と前提して、ある日のこと彼は「苗族の花嫁を探すぜ」というと彼女はいぶかり、「おれは花嫁にみそ汁をつくって貰うんだ」というと、「あら!おみそ汁は、女中が、つくってくれてよ」と彼女はいう。更に「女中の仕事を奪っちゃいけないわ」と念を押す。そこで「だから、澤木の詩には、みそ汁の香がしない。私の詩は、みそ汁の香りに占領されている。……この二人の友情は、対馬暖流の中にあつて、あくまでも、

平行線を描きつづけ、交わることはなかった。それ故に、二人の友情は六十八年も、清らかに続いたのだろう」と主人公の育ちの良さを示す逸話を記録し、相互の詩風も暗示している。

そして「同年の老詩人」である自分も昇天した後には「私の若狭小浜港にある詩碑に先ず、対馬暖流は、うち寄せ、それから一ノットの流速で北上し、澤木の詩碑（船川港に建つ）に大波小波をうちよせ続けるだろう。この交遊は、永遠に続くであろう」と詩人らしいロマンチックな文学流結語を述べているのである。

この『舩』追悼特集号で、印象的に詩人の姿を描写している。やはり元の『森』同人なる右近稜という人の「雪ふみ分けて」も注目される。「澤木さんが『森』に入られたのは、昭和五十七年秋（第十一号）からでした。はじめての女性同人、しかも、とびきり枝ぶりのいい大樹のご参加とあって、森の樹々一同……大歓迎したものです」と書き出し、9年前の年賀状で「男鹿にもお寄り下さい。男鹿はいいところですよ」と誘われたので、数日後に東北出張の足をのばし降雪の男鹿に至り、息女彰・学童の孫真帆などの人々と会い、一泊した。NHKの取材とかち合い、待ったのち「ごめんなさい。ゴタゴタしてしまして」の挨拶に続き、若き日からの経験談を聞いた。「頃合いを見て、私がカメラを取り出すと、『ダメ』と強く言われてしまいました。『わたし、写真キライです』（でも、今さっきテレビに……）と言わせぬほど凜としたお声に、私はさすがバカチョンをバッグにしまいました」と実況描写している。凜とした詩人の姿や声が伝わって来る。

昭和61年4月『おかあさんきいて－母と子の交換日記』、63年2月詩集『風の聲』をものして活躍を続けたが、平成3年(1991)2月入院することとなり男鹿・秋田・天王の諸病院で加療を続けた。4年12月10日には『舩』30号も発行を見たのであるが、明けて同5年1月24日9時52分逝去した。享年85歳。29日大竜寺で葬送、男鹿の地において明確に刻んだ文学者の生涯を終えた。

能楽研究者の娘近藤彰女の胸に抱かれ前日空を飛んだ遺骨は、3月6日熊本の正立寺で夫の眠むる墓に納められた。『舩』の発行人は彰女に引継

がれたというが、その後長男成尚である詩人山本かつたか氏が発行人になっており、詩の能力を持たないこの身も近年恵投を受けており、かつたか詩人が「菜の花の野に」の詩で、「一面群生の菜の花の野が 我が母の晩年のイメージか 老いてさらに華やかに 限りなく 菜の花忌」と詩っているのを誦し、主人公詩人の「澤木隆子メモリアル」の頁に載る、諸年代の写真に美を観、品を感じ、凜を想っているのである。

黒澤 三一

明治27年(1894)10月23日、仙北郡長信田村大字東今泉の父大信田忠吉・母ハヤの三男として誕生。両親が父の兄で、当時まで大きな蔵もあった富農の大信田久之助とサワ夫妻の養子となって、本家の籍に入った。父母が子供のいない兄弟の養子になったので、孫分になったことになる。明治27年は、8月1日に日清戦争の開戦があり、9月15日には大本営が広島に進められた直後に当たるが、28年4月には下関条約が成立し戦時状態の影響の長く厳しく及ぶことはなかった。勿論10年後の日露戦争などに至るまで軍事上の近代整備が進むので、徴兵対象の若者が多い農村部の社会が、前代までとは異なる環境に置かれることは避けられない。

学校制度も整っていくが主人公の小学生時代のことを確かに伝える文献資料などはない。ただ長兄の福蔵が12～3歳の頃に、聚落の中心部をなす酒屋の前の大杉の辺りで、若者が歌ったりして集っていたという。小学校1年生ぐらいの彼もそれを望見したり近接したりして楽しみを味っていたものと推定される。

明治40年過ぎから家運が傾いて来て、14・5歳ぐらいから他家に働きに出ることになった。いわゆる若勢生活に入った訳である。次兄鉄治と一緒に働くこともあったという。若年労働の反社会性などが常識的な問題になっている現代とは異なり、数え年15で若者は公共的労働力の正当な担当者として認められていた。彼も一人前の賃銀稼ぎの労働者だった筈である。一方60歳で老人で正式一人前労働者と認められなくなるのである。

大正4年(1915)春に角館町山谷川崎の黒澤重

兵衛（屋号は重四郎）宅に若勢奉公をすることになる。日数など決めての労働ではなく、特定の家に定備住込みの労働者であるから、ある意味では準家族である。山草刈りに馬の手綱を曳いての往復時、世に「絶品」とされた定評の「荷方節」初め、歌う民謡はすべて、村人が動かしていた手を停めて聞き惚れたという。

村娘の中では、近所の娘達が「うちの若勢ならいいのになあ」と言う程の人気だったという。その中で黒澤栄吉長女のコナミと相愛になった。

大正7年(1918)4月4日、コナミの親類である西明寺村西荒井の本元久之助のところへ、夫婦養子になった。本元が彼の民謡を好んだのかと受け止められるが、実は養家には、彼らには見せなかった、秘密の借金があったということで、翌年には協議離婚をすることになる。

とはいえ戻るべき長信田には家もないのである。結局黒澤家の方で分家になるという案が持ちあがり、それに従うことになった。名実共に黒澤三一になったわけである。祭りの掛け唄に積極的に出場し活躍、度々受賞した。勿論労働能力も優れていた。5尺2～3寸やや面長小肥りの通常体格ではあったが、力は強かったという。院内の大蔵観音や高寺観音などの祭礼でも掛け唄に出場、荷方節でよく賞を得た。

大正11年(1922)孫助方から独立した小さい住宅を丘の上に建て黒沢分家の実体が成立した。数え年で29歳になっていたが、百姓は好きでなく、隣り聚落の糸井大工に弟子入りした。やがて独立するが織機などの製作は巧みで名を知られる。傍ら、唄の名声も広まっていた。

重大な転機が訪れた。中川村に在って大正12年に休業するまでは、500世帯2000人も居住していた「日三市鉾山」の祭礼の唄に飛び入りして一位に輝き、民謡界で才能を評価発見することで実績のある小玉暁村に見出されたのである。三一の古調を評価したのだという。小玉暁村は民謡界で指導性ある学校の教師であった。それにこの11年は、神代村に明治19年に生まれ、秋田の名民謡歌手から全国トップクラスの人気民謡歌手になる佐藤貞子が3月10日に「平和記念東京博覧会」で全国第一位となった年でもあった。仙北の、そ

して秋田の民謡界隆盛の運気が満ち溢れていたのであろう。

三一の「古調」について、秋田県立近代美術館の麻生正秋前副館長は「仙北歌謡団が結成され、三一も加わっていく、いわば、小玉暁村による郷土芸能、俚謡の研究が本格的になっていくと同時に、また彼の手によって三一が育てられていくことにもなっていったといえる」（太田町史資料集別刷『秋田民謡を広めた名唱 黒澤三一の唄と人生』大仙市教育委員会）という。

更に「三一の唄を丁寧にしかも何度も聴いていると、ある特徴がみえてくる。それは基本になっているのは、仙北の地で長く歌われてきた古調、元唄だということである。尺八、三味線が入ることで、少しのばすところも出てきて、古調といえなくなっていくが、当時のオルガンの普及とあわせて考えると、西洋音楽のリズムが入るのは当然といえば当然のように思う。しかしながら、三一是、元唄、古調を完全に落とすことはなかった。暁村はそういう歌い方をする三一が好きだったのではないだろうか。恐らく両人は、いろいろ研究も重ねたことだろう。菊池淡水、佐藤東山という名伴奏者も、三一の唄にあわせて曲調を整えたのではないだろうか。三一是それほどに味わい深い歌い方をする人であったのだろう」と自ら尺八の名奏者である民謡研究家の立場で述べている。

昭和2年(1927)2月に四男行雄という重要な家族が生まれる。重要と記したのは、彼ら夫妻には長男一郎・次男正志・三男勇という行雄より年長の子がいるのに、正志は熱病で5歳で夭折、一郎は21歳で心臓を病み若死し、勇も戦時満州に居り抑留中バイカルで没したと、著名民謡研究者の宮崎隆作成の「家系図」（上掲書）にあるからである。父のことを語り得る最年長者として「聞き書き集」の冒頭で語る役割を果たしている。こういう肉親による語りつぎも先覚の実像を知る重要な手続きであろう。

昭和2年7月田口織之助による「お山囃舞踊団」の結成があり、全県大会などに出場するようになる。そしてこの団が昭和4年11月、仙台で行われた「奥羽六県郷土芸術舞踊大会」に出場することになる。仙北の芸達者ぶりが広く認知され、名

を上げた。翌年4月の「第五回全国郷土舞踊民謡大会」に田口一行と『三市』の芸名で出場し好評を得た。

昭和6年(1931)この年には大阪まで赴きパルフォン社で初レコーディングをしたと行雄が話している。レコード歌手にもなった訳である。翌7年には田口が病床に就いたので、舞踊団の指導を小玉が引きつぎ、団は「中川歌謡団」となった。そこに笛の名手佐藤章一が入団を誘われたが、兵役の関係で2年後に入団となった。佐藤貞子一座にもいて歌謡評価に秀でたこの人物が、三一に初めて会った時に「こんな唄のうまい人がいるものか」と思ったと、専門家の宮崎隆に語ったという。三一の天性ともいうべき民謡力が推知できる。

昭和7年には、6年度までの勤務で稲沢小学校長を最後に退職した小玉が、9月に「仙北歌謡団」を結成する情勢下で、黒澤の歌唱はNHKでもラジオ(当時はラヂオと書かれたが)放送頻りという状況になる。この年の夏に大民謡芸能家の佐藤貞子一座が岩瀬(角館)に来て公演した。三一は飛入出演して第二位となり、商品にテーブル掛を受けた。大阪での初レコーディングのことは先に述べたが、竹内勉『民謡年誌』にはコロンビア『日本民謡全集』(1980)により昭和8年にレコード初吹込を位置づけているという。また「仙北歌謡団」に入った彼に小玉暁村が「長者の山」を指導したが、「秋田馬子唄」をコロンビア社からレコーディングしたのは昭和7年だと、『ほるぶ民謡全集』(昭和49)の「東北2の中の解説より」の情報として、宮崎隆編の年譜にはある。何れにしてもこの頃レコード界でも彼の唄声が重視されるようになったということである。

昭和12年(1937)3月、小玉は三一・西村徳水を伴い上京、町田佳声を訪問し、「岡本コ」「荷方節」「院内節」「長者の山」などを録音した。翌13年には小玉が三一・佐藤章一らを伴い上京、コロンビア社でレコーディングをする。「タント節」「長者の山」「鮎売り節」「荷方節」「秋田音頭」「秋田甚句」などで、尺八菊池淡水・横笛佐藤章一・三味線佐藤東山・大鼓小玉暁村という伴奏だった。レコーディングは各社から引っ張り嵐だったとある。併し感心させられる黒澤三一自身の言葉があ

る。

それは、「自分の唄は、耳できいた唄をそのままうたう唄で、素朴で泥くさいのがとりえである。専属となると、仙北民謡の本当の味のある唄はうたえなくなり、東京風になるおそれがある」(既出宮崎年譜)というものである。典型的な秋田民芸者の魂の表現の言のように受け止められる。この談話描写に続けて資料は「唱歌の上手な行雄氏に民謡を教えようとするも、行雄氏は正座がいやでしかたなかった」と記している。10歳程の少年が正座を好まないのはあることであろう。しかし幼時から必要時の正座を身に付ける例も普通である。未だ「父の七光り」的発想を持たなくても不思議はないが、やがて小学校最高学年ぐらいになったら「正座」嫌いぐらいは乗り越えられるのが普通とも思える。そういう妥協をしない息子と、それを強制して芸を子に継がせようとはしない父親とに、秋田人気質の伝統性を見る思いもする。

行雄本人からの「俺も小さいとき、唄の手ほどきを受けました。正座して、きちんとしなくてはならないし、ここで息を吸い、吐くのだと教えられ、子供には重荷なものでした」(『黒澤三一の唄と人生Ⅳ聞き書き集』)という回顧もある。続いて同書に昭和8年生まれの五男小野崎要の「(父が)最盛期のときは、貧しい生活だったから、われわれにとっては厳しい人だった。わがままさせるとかはなかった。まじめに正直に働けばいいことあると言っていた。ひな(兄)が一番苦勞した」という談話が集録されている。親に盲従はしない、そして子に強制はしない秋田の気風を改めて読み取った思いがする。

昭和15年(1940)6月県の役人が引率し「秋田県派遣皇軍慰問団」の一員として小玉暁村・佐藤章一等と共に「北支まで一ヶ月以上も歌いながらまわったそうです。それから大きな戦争となり、たいへんな時代でした。帰国してから、その稼いだ金で家を建てたのです」と上記の『聞き書き集』にある。この大陸の軍慰問は「40日巡業で帰国後500円ほどの金が残った」と「年譜」にもある。

16年2月28日東京で「日本民謡協会」の発会式があり、「仙北歌謡団」と参加するが、2月後小玉暁村が亡くなる。三一は戦時中も活躍していた

し、終戦後も佐藤章一と組んで公演や講の余興などに出ていた。

昭和22年(1947)50歳代半ばの彼と佐藤貞子を二枚看板にして佐藤章一が団の活動を継承、一座を結成して各地を興行、進駐軍慰問もやった。24年11月末のことである。座長ともいべき佐藤章一宅に自転車で公演打合せに出かけたが、その帰途脳溢血の為に倒れたのである。幸に軽症だったので歩いて帰宅できた。静養したが言語を発するのに障りは生じた。

25年(1950)春には快方に向かっていて、この年結婚した行雄の婚礼でも「しっかりした声で『生保内節』を歌い、式に華をそえ」その後も4～5回舞台に立ったが、その後納得が行かなくなったらしく家にいて、牛を育て鶏を飼い静かな生活をしたと語る四男が、レコードプレイヤーを買ってくれたので毎日自分のレコードを聞いて楽しんでいたという。33年佐藤章一が病気になったことも生活様式に影響したのであろう。

昭和38年5月9日、「中川寿会」から民謡の名人として表彰され、41年11月14日には、「日本民謡協会」から『民謡技能章』を授与される。

昭和42年(1967)1月31日朝起き出さず就床のまま逝去、行年74。60年角館で民謡碑が建立され、その名を列記される。

島田 五空

明治8年(1875)4月1日山本郡能代港町島町に父豊三郎・母キエの次男長治郎として誕生。長男は4歳にして夭折している。幼時から跡継の子として育った。下には妹と2人の弟がいる。14年(1881)小学校入学、17年の9月に父が亡くなる。33歳の若さだった。当時のことであるから直ぐに家督相続して、豊三郎を襲名する。当然責任感を子供なりに感じたことであろう。尋常科4年を卒えると高等科になる。学校で学びつつ嘉藤田顕資から漢学を学んだ。やがて名俳人になる基礎学はこの段階で築かれたのであろう。22年(1889)3月高等科を卒業する。この人の正規の学校教育はここで完了している。

本家である治右衛門家に奉公し、商売を体験学習しながら和歌・俳句・漢詩などの韻文学を研究

し、読書を励行した。要するに好学の若者だったのである。「(明治)二十五六年頃ヨリ書籍代ノ支払毎月二十円ヲ越ユ。最モ勉強セシ頃ナリ」と年譜資料に記されている。後程引用する明治末の書物は四六判で530頁の厚さであり、定価は「金五拾銭」である。購入量が推測できる。

27年(1894)まだ数え年20歳なのに、活版印刷業を創めた。『淳風会雑誌』を発行する便宜を考えたのであろう。雑誌は数ヶ月で廃刊になるが、次の年には『能代商報』を創刊して、商業の状況や相場の情報を報道した。更に「香車」の俳号で古流の俳諧を平川豊秋・佐々木北涯に学ぶことになる。仲間と作品発表の場を得るために印刷業を営むのも平凡ではないが、経済新聞を発行することになれば文学愛好と経済実務を併行させて、学習と実践を展開したことになる。明白に非凡な青年と表現できる。「香車」はやがて「悟空」と改められた。「五空」に至る俳号である。

28年は当時の数え方で21歳である。徴兵検査の年で男が一人前になる年齢である。それ以前から月に20円という莫大な図書購入をしていたのであるから、蔵書が充実し読書の成果も絶大なものがあつたと推量できる。29年になると師北涯に誘導されて当時の新しい俳句に連なる「日本派ノ句ヲ学ビ、日本新聞及ホト、ギスニ投吟ス」と記録されるようになる。津軽出身の文化人陸羯南(くがかつなん・本名中田実)の出している『日本』という新聞に投句し、『日本』紙上で革新俳句を主唱していた正岡子規(本名常規)に孫悟空のような俳句吟者といわれたと伝えられる。『ホト、ギス』を子規が創刊したのは明治30年であるから、この段階には完全に子規系の俳人になっていたのであろう。前年の29年発刊の『ぬしろ』誌にもそれは表れていたであろうが、30年8月には同人7名で「北斗吟社」を興して活動を展開している。

この30年(1897)5月には地元能代港町坂本定寿の長孫の女子であるイサ(15歳)と結婚している。8歳の年齢差である。石版印刷業も始めている。文字だけではなく絵なども鮮明に印刷することができ、IT印刷などの登場する前においては、重要な一つの技法であった。そうしているうちに明治31年8月初めて、同県人石井露月のことを

知って、手紙で教示を得ることになる。

今回の五空の館話取り上げは、実は5年前に露月の話をした時からの課題であった。俳句の門外漢であるこの身が露月を話題にしたことで『俳星』を都度継続鑑賞の好運に恵まれ、この秋田から発行されている伝統豊かな俳誌について、明治の関係者の双璧の両宗匠を、是非揃えて顕彰しなければならないと考えていたからである。その両宗匠の直接交流はこの時に始まったのであった。

露月は前年である30年12月に『ホト、ギス』の選者になっているので、それがその存在を広く知られる契機になった可能性もある。手紙を受けた露月は10月上京するに際して能代を訪問し、「北斗吟社」の人々と会吟し、島田家に一泊(二泊とも)した。この延長線上で、悟空はやがて高浜虚子や佐藤紅緑の知遇をば受けることになる。サトーハチローの父紅緑は津軽出身なので、近接地能代の青年俳人に親しみを感じるのは自然のことであろう。

32年10月に初の子(男)が誕生したが即日亡くなった。そのことが直接因とは考え難いが、島田は極めて積極的に政治の世界に進出するようになる。数年後には現実に各種議員に当選することになる。

明治33年(1900)3月、正岡子規の影響下に島田は露月らと図って『俳星』誌を発刊する。全国的にも有名で息の永い俳誌の誕生であり、誌名は子規の命名であるという。5月には月初めに島田が初上京をし、紅緑の紹介によって子規と初めての対面をする。更には虚子や内藤鳴雪・河東碧梧桐らの著名俳人とも会い、吟句することになる。そして8月には初めて露月の女米木の家を訪問するのである。

34年には春に奥羽・北海道の吟遊の旅に出る。吟遊は俳人にとって、必要かつ重要な学習法であり、稽古であった。人間としても自己充実・自己発揮の業なのである。8月には矢田挿雲・岩動炎天などの来遊がある。斯界における島田の地位の向上していく過程がわかる。しかしこの月初には長女れんが2歳で夭折し、また幼子を失った。

35年8月近火があって類焼し、蔵書10,000冊を焼失した。子規はそのことを聞き「腹中に残る

暑さや二万卷」と見舞吟を寄せた。子規には「あたら二万卷烏有に帰せしとかや」と情報が伝わり、「吾空兄」という宛名だったことを年譜資料は記している。「悟空」から「呉空」「五工」などと書き替え、大正13年(1924)に「五空」に定まったということである。

万卷を失うことがあったことによるのか、これから書物・雑誌・新聞などの販売も業務とし始める。明治36年8月には『能代新報』の発刊も行うようになる。この年5月には身延山に参詣する。実は菩提寺が日蓮宗だったことから自然のことであるが、なお西下し伊勢神宮参拝も行っている。これも日本人としては自然のことといえよう。関西から中京名古屋の視察もしている。そういえば36年2月9日には長男の「長」が誕生しているし、10月には政界に現実に地歩を占める山本郡会議員に当選し、これから郡制廃止に至る21年間議員を続け、表彰されることになる。議員生活との関係は不明ながら、この頃から囲碁を始めた。

37年(1904)4月には町会議員に当選し、これから終身その席を保ち続ける。人望と集票力の卓越していることがわかる。だが悲しいこともあった。6月に22歳の妻イサが病死したのである。生活上欠くことができなかつたのであろう、8月には南秋田郡弘戸村の石川尚司の長女ゆきをを後妻に迎える。その安定の上に調整をしたのであろう、翌38年には秋田市で「全県俳句大会」を開き、それ以後各郡持ち回り開催の礎を据えた。12月には日露戦争直後の満州・朝鮮の視察に赴き翌年2月に帰った。

40年(1907)には7月に碧梧桐や露月らと句会を、8月にも七夕見物に來能の碧梧桐・露月・北涯らと句会を開き、俳人活動を深めるが、郡立山本図書館長に就任する行政的役割も果たしていた。41年夏に虚子と平福百穂が訪ねて来るようなことがあり、9月には東宮の行啓に、秋田市役所から殿下奉迎の十数句の吟詠を求められた。作句は後に大正天皇となる皇太子の台覧に供せられた。

35歳の42年には春に京阪地方に再遊、8月に北海道に吟遊、12月弓を始めるが、小笠原宗家に入門するという徹底ぶりを示す。そしてこの42

年には注目して紹介したい画期的な出来事があった。12月1日発行の『知られたる秋田』（編纂兼発行瀧澤武）は、先に述べた「金五拾銭」の本であるが、その中に島田『能代新報』社長が活写されているのである。

この頃秋田市内にあった『秋田魁』・『東北公論』・『秋田時事』の三新聞社が協力して、中央のジャーナリズムに秋田の良さを「生」で知らせようという企画において、秋田を実地に探訪した三十数名のジャーナリストが、明治42年7月22日から31日までの10日間、秋田県内の南から北に向かって旅をし、多くのものを描写し論述した文献である。

この本の「秋田巡遊記」という題で『国民新聞』の阿部充家記者の書いた文章を紹介する。「能代の歓迎」という項目の叙述の中で、「一行が能代に向ふや小林郡長、谷田部町長、三浦県会議員、島田能代新報社長の諸氏は大久保まで出迎はれたり。小林郡長は故高橋白特庵の眷顧を受け官報局に奉職せし事ありしが、今や当地に帰臥し一意地方の発展に貢献しつつあり。谷田部町長は相見るところ質朴にして口訥なるも、時に奇警なる虚言を発して人をして抱腹せしむ。島田氏も一見其才気煥発の士たるを知べきなり。是等出迎諸氏が一行中に加はりし事とて、車中の談話頓に花を咲し来て汽車の進むを覚えざりき」とあり郡長や町長と並ぶ存在であることが分かる。

また次の「山本倶楽部の歓迎」の項目の中でも「当夜の会場たる山本倶楽部は能代人士の娯楽の場に供せん為め特に建設されたるものにして、地方に稀なる構造にて階上の客間は一時に三百人を容れ得る大広間である。当夜は玄関の入口には電灯にてウェルカムの文字を表はし、屋上より縦横に交叉された各国旗を照す、花電灯は三銀行よりの寄贈にかゝる七夕燈とて竜宮の彩色画にて灯身を張りたる大燈籠を相映じて、中々の壯観なりき。かくて歎（歎の誤植）迎の宴開かるゝや谷田部町長及び井坂（直幹）秋田木材会社社長は驪迎の挨拶をなし、一行の總代之に対し答辞を述べ、島田能代社長は能代を紹介する席上演説を試み、終りに当地の名物を数え来って、只今御挨拶をした谷田部町長も名物の一だが小林郡長も其の一だと述べ

来ると、誰か座の一隅より島田社長も亦た其名物の一だと和したので満座大笑大喝采で到頭三長三名物と云ふ熟語までが出来てしまった。例により当地名物の能代音頭等の余興などありて主客十二分の驪を尽して退散した」とあるのを見ると、この俳人の活力ある行動と、それに対する評価の高さが分かる。並の文学愛好家なのではない。

一寸不思議に思うこともある。井坂大社長が名物でない点である。しかしこれはこの書物の前半の方に「秋田木材会社の事業と人物」なる篇があって、『実業之日本』の永田岳瀨記者が十和田湖養鱒の和井内貞行などと並べて特論している。秋田・大阪・東京・北見・根室・扇田（北秋）に支店を持つ大組織の経営者は能代の名物とは別格で、敢えて言えば秋田を代表する全日本の名物という認識だったのであろう。むしろ「名物」という次元を冗談の場でも超えた存在だったのであろう。

次に「出発前の小集」という項目があり、そこでは翌日朝能代を出発する途次、当町実業家の倶楽部たる偕楽社に立寄り、「井坂木材会社社長より木材会社の現状より製材官營に関する談話、島田新報社長より能代町の将来に関する希望に就て演述する所あり、終つて茶菓の饗応を受たり」とあって井坂大社長と並んで島田社長が、巡遊団に結びの演述を行う能代の重要人であったことが明記されているのである。

今の時代でも観光客を多く呼び寄せることが、行政でも政治でも大命題になっている。明治時代にも命題であったことは確かである。大俳人がかかる役割を具体的に果たしていたことを、先覚の持つ重要な要件として改めて知った。

明治43年(1910)4月には、名古屋での全日本新聞記者大会に出席し、7月には井坂社長らと樺太を視察し、北海道にも及ぶ。井坂社長は森林資源を対象にしたかもしれないが、俳人にはそれなりの判断があったのであろう。以前、小畑知事が青年時代樺太に赴いたことや、男鹿の中川重春がやはり青年期樺太庁に勤めたことに館話で触れたが、ロシアの支配下にあった南樺太が38年(1905)の講和条約で日本領になった。渡海はし易いし東ヨーロッパの雰囲気もあったに違いない。開明的な人々が樺太に関心を持ったことも理

解できる。11月『能代新報』を『北羽新報』と改称する。44年県内各地の句会に出席。

45年(1912)1月と8月に弓の「二十射皆中」を2度も達成。この年5月露月が来遊するが、図書館長を辞任し、『俳星』を休刊するということもあった。或いはこの頃政治に熱中していて、河野広中等と各所に遊説していたというから、文化活動の熱が冷めていたのかとも思えるが、10月能代に俳句大会を開き、87名来会、露月や荻原井泉水が五空庵に宿泊しているの、俳句を忘れたのではないことがわかる。

世は大正になり、3年(1914)相撲の能代潟を錦嶋部屋に入門させる。4年には次男乙矢が生まれるし、この年9月には県議員に当選する。大正5年には女子つるねが生まれる。以前には「数人出生アリシモ皆夭ス」と年譜に書かれている島田にも家族充実の時が来たのである。7年(1918)6月17日には三男豊彦が誕生するなど生長の安定も見られる。これまでの子供の名とは異なる感じのこの名は、命名者が露月だったからであろう。

県議にもなった彼の活動面は広がり、6年には新潟への旅や上京もするがこの頃から吐き気を催す症状が生じた。8年には五能線敷設陳情のため4回も上京した。9年には能代会館が創立され理事長に就任、そして大正10年1月には国政選挙に立候補する。信条によるのであろう原敬内閣の政友会優勢の時世に憲政会から出て落選、代議士にはならなかった。6月には身延山に参詣する。7月に井坂直幹が亡くなったので、10月にはその伝記資料の蒐集に郷里の常陸や勉強した東京に出かける。翌11年には彼が中心になった編集によって『井坂直幹』の伝記が刊行される。この11年8月には再び露月庵を訪ねているが、9月には67歳の母を失った。

12年5月再び満州・朝鮮を視察し、夏には「十方庵」という庵を結んだ。9月にはまた県議員に当選、秋田県新聞販売業組合を創立、組合長になる。13年(1924)1月自句集を作り露月の命名を求めて『裘』の名を付す。5月憲政会を脱し政党と縁を断った。8月には十方庵で句会、露月も一泊した。10月には台湾視察を行い、越中富山に自分の祖先のルーツを訪ねた。12月に長男の長が

結婚するのでその前提だったのかもしれない。

14年3月から4月にかけて伊勢から九州に旅し、6月十方庵に露月来訪、句会を開く。8月能代潟後援の功績で東京大角力の木戸御免の特典を得る。15年1月には長孫女寿子誕生。3月には信越から京阪の視察をし、5月会津、8月北海道、10月岩手と旅をする。俳句の修練をしたのであろう、10月に『俳星』を復刊し、11月には露月の許を訪れる。昭和2年3月胃酸過多症になるが4月は能代潟の結婚式で上京、8月雄勝に吟遊し、石田三千丈等と同行。9月11日長孫の豊一が生まれる。11月露月等と京阪から吉野に遊び、中間別行動したが、露月と四国で会し、正岡子規の関係遺蹟を尋ね東京経由で帰る。俳人の究極行動ともいえよう。

昭和3年(1928)5月能代で俳句の大会があり、露月もやって来て宿泊。6月には県南の抱返り溪谷・六郷・金(かね)沢などを露月と同行して吟行する。8月にも露月と粕毛峡の方に吟行する。

ところが9月18日戸米川小学校鈴木校長送別会で、学校後援者石井露月が挨拶中に倒れそのまま夕方7時に56歳で逝去。訃報に五空は20日女米木を訪れ21日の葬儀に出席する。10月17日の追悼会にも五空は女米木に赴く。18日には能代で『俳星』の将来を俳人達と話し合う。それから2カ月余12月26日午前1時に逝去。行年54。29日本澄寺に葬る。

齋藤 寅次郎

明治38年(1905)1月30日由利郡矢島町館町に父齋藤孝一郎、母常代の次男寅二郎として誕生。兄弟姉妹は8人であった。父は町の収入役で、母は隣村の豪農の娘であった。関連して母親が「近所の女房共に小金を貸し、利息を取りに廻るのは私の役目、その度にお駄賃を貰ってお菓子を食べるのが楽しみだった」と『自伝』(清流社出版)に述べている。

44年(1911)小学校入学。自ら進んで父や登記所の書記であった祖父に弁当を運び届けたり、母の買物の使い走りに当たったという。大人になって喜劇映画の大監督になるのも宜なる哉と思われるような自己紹介の文がある。

即ち駄賃を貰うだけでは足りなくて、「妹の貯金を盗んで食べた。その晩は必ず恐い夢を見る。次の日、そっと返して置く。しばらくすると又盗む。夢を見る、又返す、をくり返した」とある。また「妹の子守りをして小便だらけになった時は特別手当を要求した。だんだんずうずうしくなって妹のへそくりを全部使い果たしたところで、悪事露見、母は怒った。平常はやさしい母であったが、嘘と盗みには厳しかった。今迄も嘘を言って蔵へ入れられた事があった。今度は嘘に盗みが重なって重罪、とてものがれられないと思った私は、人手を煩わす事なく入れられる前に自ら蔵の中に這入った。雑然と積まれた箱の中に女の鬘を発見した。古びた刀等も出てきた。それをかぶって踊ったり立廻りのまねをしたり、これぞ本当の一人芝居、ちっとも退屈を感じなかった。それを弟達が窓からのぞいていたらしい」と書く。

更に続く。「夜になって父が戸を開けて出してくれた。母が反対するのを父が夕食を出してくれた。ここでホイホイ食っては男が立たぬ。ハンガー・ストライキを始めた。次の朝もがまんして食わずに学校へ行った」と書く。読んでいるうちに自分の子供の頃のことを想起した。昭和初年の田舎のこと故、幼稚園などはなかった。5歳ぐらいで末子の身は兄姉が登校すると大人の中に一人だった。ある日それが何であったかは記憶していないが何か悪さをして父親に口頭で注意された。友だちに地団太踏んで泣きわめいて親に抵抗する子がいたので、多分自分も何時か暴れてみたいと思ったのであろう。「御免なさい」とも言わず戸外に飛び出した。家は米沢から新潟に通じ、越後の瞽女や秋田の人形芝居・民謡一座などもよく通る、明治に造られた県道に面していた。今は国道で舗装されているが、当時家の前の道路は砂利道であった。小さい掌を合わせて路面の砂利を精一杯掬い上げて、戸口に駆け込み茶の間の上り口の土間に立ったまま、勢よく室の中に投げ散らした。室は秋から春には畳敷であったが、夏分は板の間で、囲炉裏の周囲の一畳幅だけに薄縁を敷く習慣だった。この事件は夏場のことだったので、チビ助の放り出した量の砂利でも音だけは豊かに転げ響いた。心の中で悪いことをしていると百も承知

の小僧は直ぐ飛び出して逃げようとした。背後に「待てッ」と父親の声がした。待てと言われて逃げるのは卑怯だ。振り返ると、声の厳しさとは全く別で静かに上座に坐ったままの父親が、こちらを見詰めていた。表情には悲しそうな眼差しさえ見えた。もともと叩かれた経験はなかったが、叱られたことはあった。強く叱られる筈と思っていたのに予測は外れた。途端に愚かなことをしたなァと幼児なりに思うと涙が出そうになった。走りもせずに戸外に出て直ぐ前の「百石山」の頂を振り仰いだ。もう荒ぶることは決してしまいと思った。

末子の場合は単純でひ弱であったが、次男の立場は違っていた。このハンガー・ストライキではない。「兄と喧嘩したのは一度だけ、三つ年上の兄はやはり強かった。その時も、負けた自分の方がお蔵入り、その度に父が、母に内緒でニギリめしを作って差し入れしてくれた。弟や妹をいじめた事は一度も無い。学校で喧嘩しても相手は上級生ばかり」と自ら書く通り、年の近い、そして周囲の見る眼も絶対的に優位の長男がいて心身共に対抗性を培われ鍛えられる次男と、直ぐ上が姉で9歳も離れていて、兄達と喧嘩する可能性も全くない末子とは条件が全く異なるのであろう。

だが一つここで共通のことがある。冷静な父親の愛ある訓育の存在することである。この父の支えと導きがやがて独自性豊かな芸術家の道を自ら開拓し築き上げる、本名寅二郎、芸術家名「寅次郎」が形成される根底に厳存していることが認められると考える。勿論「一年一度の活動写真の巡業がやって来た。尾上松之助の忍術、新派大悲劇、アメリカの短編喜劇等々、三日間のうち一回は見せてもらったが、自分は毎日見たいが金がない。考えた末、宣伝の街廻りの旗持ちを志願した。アルバイトである。大人の半纏を着せられて楽隊の先頭に並んで歩くのである。秋空の晴れた日、良い気分であった」という映画との出会いも無視はできまい。

この旗持ちは小学校尋常科生の時分の話になっている。名家という母の本家から「子供の教育が悪い」と怒られ、泣きながら帰って来た母親に「お金をやるから旗持ちだけはやめてくれ」といわれ

たのに、次の年も次の年も巡業が来ると旗持ちを止めなかった。そして「私の生涯の映画への芽生えはこの頃からではなかったか…」と自らも書いているが、母のこの反対があったのに何年も続けた背景には、父親の暗黙の許しなり同意なりがあったのではないかと思われる。

大正6年(1917)高等科に進んだ。兄寅太郎は秋田師範学校に進学したが、家計を考えて自分は上級学校進学は目指さなかった。そこで祖父弁次郎の弟である小川屋呉服店に住み込みの丁稚奉公をする。目的の一つは自転車を楽しむことにあったという。野球の才能も豊かであったが、矢島町に3台ぐらいしかない自転車のスピードを楽しみながら、14歳の大人がやっと持ち上げるような呉服の荷物を軽々と運搬する活躍ぶりだった。

ところが出来事があった。一つは愛用自転車が曲り角で出会い頭の子供を避けて鍛冶屋に飛び込み自転車を修理しなければならなかった事故、一つは近くの小学校の火事に駆けつけ消火を手伝い、明け方鎮火後帰宅、店の蔵の防火作業のことなど全く考えなかった不始末である。朝に帰って初めてその過誤を悟って即刻「お暇」を乞うということになった。

矢島小学校高等科卒業間近に上京して苦学する決心をする。卒業一月前東京市芝区白金今里町宇津木医院の書生になった。院長は祖父の弟であった。「爺さん、……宇津木からも金を借りているらしい」と書いているが、印象深いのは学友との別れの場面である。「かすりの着物にハカマ、風呂敷包を背負った姿は『次郎物語』そのままであった。同級生達が山の上の校庭から下の道を通る私に手をふってくれた」とある。「数年後、爺さんが死んだと知らせがあったが、仕事で葬式にも帰れなかった」というから、上京後に帰省するまでは相当期間があったものと認められる。

先ず医院では男3人女4人の小中学生の10足ぐらいの靴を楽しく磨き、その中から男3人女2人が彼の方言直しの話し相手になってくれて、東京言葉を身に付ける。やがて親類ではなく他人の飯が食いたくて浅草の象潟町にある小林医院に移り、働きながら明治薬学校に通う生活を始めた。象潟町は明治5年(1872)に六郷氏上屋敷跡に起

こされた町で、昭和41年に浅草四丁目の一部となった。今も浅草象潟の地名は遺っている。

大正9年(1920)浅草六区の映画街に関心が生じ、学校も中退し星製菓宣伝部に入社、映写技師の講習を受ける。活動写真隊地方巡業部で九州方面を2年間廻った。大正11年には遂に祖父の兄忠一郎の子である斎藤佳三(佳三と父孝一郎が従兄弟)の紹介で蒲田の松竹キネマ映画研究所に入った。大久保忠寿監督のもとで助監督となる。1年後輩に小津安二郎がいた。

大正15年(1926)大久保監督と共同監督で2本の映画を撮った経験の後に監督に昇進。『桂小五郎と幾松』を5月21日に第一回作品として公開する。桂は後の木戸孝允。もともとは藩医和田昌景の子で桂九郎兵衛の養子となったのであるが、吉田松陰門下でもある。慶応元年木戸と改姓した。幾松というのは木戸夫人松子になる人の芸者時の名である。これで見ると普通の時代劇監督としての出発である。

だが翌昭和2年(1927)に清水宏と共同監督で『不景気征伐』という大恐慌直前に街をさまよう空腹男の喜劇作品を撮った。翌3年には単独作品で『浮気征伐』なる初単独喜劇映画を製作した。自分にとっての喜劇作品の意義というものを認識したものの如くで、以後は喜劇を主として監督業を積み重ねて行く。『チンドン屋』という定年課長が不況下チンドン屋になった作品、『活動狂』なるチャップリンが尾上松之助の忍術の真似をするという作品などを発表する。

昭和4年になって『愛して頂戴』なる、失業サラリーマンが強盗を捕まえることを機会に恋人と結ばれるという作品、有名な『西部戦線異状なし』のパロディ『全部精神異常あり』などを作る。そしてこの年、自分の映画にも出演していた女優浪花友子(本名石津霊子〈よしこ〉)と結婚する。翌年長男稔誕生。この昭和5年は渡辺篤主演『石川五右衛門の法事』で、「全国映画館連盟杯」を受ける好評を得て、評価は一層定まった。『摩登籠の鳥』は自称「撮影時間最短」という作品で24時間で撮ったという。やはり非凡な映画監督である。

昭和7年(1932)千葉県のある村で起きた「一家八

人殺し』の事件について、犯人逮捕も待たずに『熊の八ツ切り事件』という映画にした。社会的関心の強い出来事を戯画化した作品である。出来事といえばチャップリンの来日に関連し『チャップリンよ何故泣くか』という風刺作品を撮った。和製チャップリンの小倉繁の役者振りが評判になったが、別にチャップリンが観たら激怒したであろうともいわれたという。大胆な監督根性を持っていたのである。8年には『和製キングコング』も作った。

昭和10年(1935)当時流行り始めていた「産児制限」を皮肉くするように、『子宝騒動』という好評の喜劇を撮った。傑作の評価高く「キネマ旬報」のベストテンで第七位に入賞した。『この子捨てざれば』などの名作も作った。時世はトーキーの時代を迎えつつあったが、彼はサイレント版にこだわっていたという。この年次男晶康が生まれた。しかし翌11年蒲田撮影所が大船に移転すると、子連れの前妻が子沢山の女と結婚するという、『女は何故怖い』なる初トーキー作品を撮った。

昭和12年(1937)戦後も名老年役で有名な笠智衆を主演とする『この親に罪ありや』を作る。笠は小津作品の役者だったのを、自作で初主演にしたのだ。その後松竹を退社し東宝に移った。妻も女優を引退して家庭人となった。翌年三男厚生が誕生する。移籍初作品は『エノケンの法界坊』で榎本健一と出会い、新鮮でヒットした。エンタツ・アチャコの『水戸黄門漫遊記』、『ロッパのおとうさん』と続く。14年の古川緑波『ロッパの大久保彦左衛門』には売出し中の「あきれたぼういず」も加わった。

15年(1940)『明朗五人男』を作ったものの飯をこぼすシーンなど検閲でカットされ、公開は戦後になる。16年『人生は六十一から』を撮影中母が亡くなる。そして戦争が本格的になり銃後生活も厳しく作品本数も限られる中、珍しく『敵は幾万ありとても』なる緑波主演の戦意昂揚映画を19年に作る。多分作らざるを得なかったのであろう。

昭和21年(1946)戦後第一作品『東京五人男』の監督では占領軍の細かい検閲を受けるが、戦後日本映画で最初に米国に行った作品となる。22年には深刻な争議の東宝から新東宝に転じ初監督作

品『見たり聞いたりためしたり』や、人気の笠置シズ子主演『浮世も天国』を作り、23年には『唄まつり百万両』という戦後初音楽映画を作ったりで実力を示す。初めて東横映画で撮った『野球狂時代』では大下弘選手が特別出演をし話題になる。

24年美空ひばりが子役出演した『のど自慢狂時代』以下「ひばり物」を次々に、また浮浪児題材の岡晴夫出演『男の涙』などを撮る。25年(1950)には岡の『憧れのハワイ航路』では実景のみハワイに撮りに行くという時世像を示した。『向う三軒両隣』三・四話や柳家金語楼主演『戦後派(アプレ)親父』、ひばりの『東京キッド』、片岡千恵蔵の『天皇の帽子』、26年ひばりの『母を慕いて』、アチャコの『海を渡る千万長者』、伴淳の『吃七捕物帖』などの話題作を監督する。伴淳が名を上げることになる。27年は新東宝を拠点に東宝とも古巣の松竹とも仕事の間を拡大して『大当りパチンコ娘』『歌くらべ荒神山』『びっくり三銃士』などを製作する。巨匠の本領を遺憾なく発揮することになる。

昭和28年(1953)「アジャパー」の大流行語を連発する伴淳こと伴淳三郎を主演とする『アジャパー天国』で注目を集める。巨匠初のカラー映画『ハワイ珍道中』は喜劇の人気俳優が揃ってハワイロケーションをした。30年の作『お父さんはお人好し』は、松竹時代を想起させる趣を持っていた。

36年(1961)エノケン・アチャコそれにバタヤン(田端義夫)ら多くの芸人が特別出演した、三木のり平主演の『誰よりも金を愛す』は間もなく製作活動を終える新東宝最後の作品とされる。そして翌37年には朝日奈喬の筆名で長男稔の脚本による田崎潤主演の『大笑い清水港・三下二挺拳銃』を撮るが、これが最後の公開作品となる。

47年(1972)には印象的なことがあった。彼自身が映画界を遠ざかってはいたのであるが、当時人気の『男はつらいよ』作品の主人公に「寅次郎」は譲って、自分の芸名を本名の「寅二郎」にしたのである。それから10年趣味のマラソンで全国を廻ったり、世界にも出かけたりの悠々自適生活を送っていたが、昭和57年(1982)5月1日肝硬変のため逝去した。享年77歳。即日勲四等瑞宝

章が授けられた。

田口 掬汀

明治8年(1875)1月28日仙北郡角館町中町に父田口久兵衛・母トミの次男菊治として誕生する。兄は弁蔵で下に妹イヨが生まれる。家業としては雑貨商の父は、絵画や彫刻の巧みな粹人の俳人であった。菊治はその父の素質を身に享けていた。13年5歳で人形師である金沢弁治の養子になった。何も生活上の問題があった訳でも、また金沢家の子供になって家督を嗣ぐというような必要があった訳でもなかった。60歳以上の親を持つと長生きするという信仰的な考え方があったことに依るものであった。別に言えば60歳以上の人が少なかったという社会実態が前提にあったともいえる。15年小学校に入学した。環境が素質に更なる刺戟を与えたのであろう、芝居好きの少年に育った。

23年(1890)小学校高等科を卒業する。この後に文芸・芸術界の指導的実践者となる人の正規な最終学歴はここまでであったという。ここで生家に戻り鎌川小間物店の丁稚になった。月琴を愛する音楽好きの若者であった。今から見ると不思議にも思えるが、翌24年5月29日に17歳で大曲の仙北初五郎長女アキノと結婚するのである。共働きでもしたのかとも思えるが、翌年に長男啓一郎が誕生するので、それも難しかったと考えられる。29年には次男志朗、30年には年子の三男省吾、そして33年には四男雄二が生まれる。この間29年には雑誌『新聲』に第一巻第二号から投稿を始めた。この雑誌は角館出身3歳年下の佐藤儀助(義亮)が上京して創始した新聲社が29年に創刊したものである。

若くして丁稚は兎に角、縫製人・旅人宿・29年12月創刊の『秋田新聞』通信員などと職業経験を重ねたが、30年発起人の一人として「新聲倶楽部」を立ち上げ、31年には『新聲』第二回懸賞文に「まぼろし日記」で応募し、一等賞当選金5円を得た。32年(1899)頃には郡役所雇となった。32年5月21日に、小学校の恩師大野重一(愛山)宅に平福百穂らと集まって会合中に、262戸が焼失する山田大火が発生。田口家も平福家も類焼してしまう。

百穂の勧めもあって33年共に上京することになる。盛岡では百穂の後援者たる瀬川安五郎邸に宿泊する。瀬川は角館に近い荒川鉦山を経営し、百穂は父の穂庵が荒川鉦山に勤めたりして瀬川の応援を受けていたので、自分も後援されていた。安五郎の秋田邸は大町3丁目にあり、明治14年の天皇東北巡幸時には行在所になった。当然盛岡の本邸も豪華であったに違いない。着京後百穂は結城素明方に身を寄せ、田口は佐藤義亮の新聲社の編集部勤務した。明治後期から角館出身で東京活動の文化人の活躍を三角形に擬し、田口・百穂・佐藤をそれぞれ一辺とした興味ある説さえ出されている。この年『秋田魁新報』付録に発表した、小説『三蓋松』が田口のデビュー作とされている。掬汀の雅号は20歳頃から用いていたという。11月新聲社に正式入社をする。

34年(1901)5月には『新聲』第五編第五号に「與謝野寛對新聲社誹毀事件顛末」を書く。7月には金港堂懸賞小説に「人の罪」が当選、処女出版となり、流行作家になる。新聲社からも小説『片男浪』を出版した。この年佐藤橘香(義亮)・掬汀・正岡藝陽・高須梅溪らの責任編輯制を採用したので、新聲社の充実と田口掬汀の関係は一層明確になる。

35年(1902)元日月刊雑誌『アカツキ』に「別れ路」発表、2月新聲社『青年叢話』上の巻に「才気とは何ぞや」、下の巻に「真生命」を執筆。4月新聲社『現代百人豪』第三編に「貧民王」を発表。この4月17日に角館竹楼において送別会があり、そこにおける彼の発言は、古今に通ずる名言のように思う。即ち「(秋田県人は)因循で猜疑心に富めることは、須らく矯正すべきもの。又徒らに物質的の文明をのみ欲せず、所謂新思想の輸入に心を用へば、各方面の事業に於て一層の進歩、發達を来す事又疑ひなからん」(明治35年4月22日付『秋田魁新報』)というものである。今度は家族も角館を離れての移住上京であった。

そして『婦人は結婚すべき乎』なる訳本も9月に出している。この欧文著書、千葉秀浦との共訳とはいえども、その翻訳力には恐れ入らざるを得ない。10月に出版の『魔詩人』(新聲社)が風俗を乱すと発禁処分を受けるが、その多方面に亘る

筆力の卓越さにも驚かざるを得ない。更に発禁事件などにめぐることなく、『新聲』の第八編第六号に掬汀は、崑崙を名乗る義亮・金子薫園とによる「十一月三日」という課題で「八百字競作」を行い、投稿する若者に模範を示す企画を催しているのである。経営側としても作家側・執筆者側としても、疲れを知らぬ青年文人であるといえる。東京だけではなく、『大阪毎日新聞』にも「新生涯」を連載する。

明治36年(1903)1月「機動演習」、3月「片瀬川」を『新聲』に発表し、8月には『文藝倶楽部』に「極楽村」を發した。「極楽村」の筆名は「鏡太郎」を用いたが、これは年少時に菊治から鏡次郎を名乗っていたので、それに関連づけてのことであろう。そしてこの9月末には、会社を百穂・薫園らと共に退職し、やがて万朝報に入社した。37年1月12日から『万朝報』に「女夫波」を5月12日まで連載し、後『女夫波』上・下(有倫堂)として刊行する。彼の著述には外国語の著述と関係深いものもある。現実に、大正15年(1926)の『明治大正文学美術人名辞書』に「また新聞記者生活をやったが、思ふ所あって、後に東京外国語学校に入り、仏語専修科に学び、小説家として名を著すに至った」(松本龍之助編)という記述のあるのに対応して、1996年(平成8)8月の「わが国近代美術史における田口掬汀の業績」という論究の中で、秋田県立近代美術館の田中日佐夫館長は、先に触れた三角形の一辺に比す卓説を展開された続きに「東京外国語学校仏語専修科で学んだということについては確認することはできませんでしたが」と明記している。東京外語大に関わる研修の形態は定かでないというのが実態なのであろうか。

38年(1905)4月から11月まで『万朝報』に代表作の一つ「伯爵夫人」前・後編を連載する。併せて6月には『極楽村』を新聲社退社後35年に義亮設立の新潮社から刊行する。秋には「新生涯」「女夫波」が本郷座などで上演され、『伯爵夫人』が刊行された。39年「黒風」を「みぎわ小生」筆名で『時事』に連載し、「伯爵夫人」の本郷座上演がある。「みぎわ小生」の由来は次のようなことではあるまいかと推考する。

それは『日本古書通信』の昭和38年5月15日号に「二十歳前後の頃、鰯瀬(かじかせ)川岸の稲荷の祠に出かけて、本を読んだり、文章を学んだりしたものだ。飽きがくると流れで顔を洗い、口中の熱をすすぎ去って、また勉強にとりかかった。行末何になる身かわからぬけれど汀々掬んで勉強した」という追憶があることに依ってである。即ち掬汀の称の起こりでもあろうが、みぎわ=汀であるからである。

明治40年(1907)、『時事新報』に「追恨」を連載。41年9月には同紙に「日本の恋」を發表。更に「二葉草」を連載したが、所属としては大阪毎日新聞社に入社する。42年には喜劇に取組み、9月「謔の世界」を雑誌『太陽』に、11月「鈴ヶ森事件」を同様『新小説』に発表し、43年1月にも「飛行船」を『演藝画報』に発表し、多才振りを發揮する。43年1月から「外相夫人」を『大阪毎日新聞』に連載。この段階で大毎の記者が50回分の原稿を紛失した事件が生じたが、彼は1回5枚当りの原稿250枚を二日で再筆したというのである。作家によくある遅筆とは全く異なる速書き力を備えていた人なのである。

44年「渦」が上演され、演劇界にも地歩を占めた彼は、この頃の段階で川上音二郎の大阪帝国座の座付作家になっている。明治45年は当時の年齢呼称で38歳を数えるが、「粋な捌き」を帝国劇場のために書き下ろしている。

大正2年(1913)日本美術学院を設立する。3年には「真心」を『大阪毎日新聞』に連載するが、それが別れの挨拶だったのか大阪毎日を退社する。そして翌4年には『大阪朝日新聞』に「ふたおもて」という5月29日から12月17日までの長編小説を連載した。『中央美術』を創刊したのもこの年で、『ふたおもて』は新潮社から前・後編の本として出る。

大正5年(1916)金鈴社を興こした。結城素明・鏑木清方・松岡映丘・平福百穂ら帝展系の作家が同人であった。金鈴社の活動は講演会と展覧会とが対にして催され、第一回講演会がこの年11月東京美術学校倶楽部で開かれ、第一回展は翌6年2月1日から7日まで三越で開かれた。第二回講演会は6年3月美校・同展は11月三越、第三回

講演会は12月美校・同展は7年5月日本橋倶楽部、第四回講演会は7年5月上野公園美術倶楽部・同展は8年6月上野公園竹之臺陳列館、第五回講演会は9年2月美校・同展は6月竹之臺、第六回講演会は6月美校・同展は10年6月日本橋、そして第七回展は11年5月三越であった。時の流れであろう6月2日金鈴社解散式が築地精養軒で行われる。

しかし掬汀の美術活動が衰えたのではない。大正7年44歳の壮年に達していた彼は平福百穂と共に「帝国美術館」建設のために奔走し、議会にも働きかけていたようであるし、この年9月に信州白田町で「日本美術学院成績品展覧会」をも開いている。何よりも大正9年6月21日から27日まで上野の竹之臺で第一回中央美術社展を開き、翌年5月に第二回同展を同所で開いている。そちらが前途安心と認めたので金鈴社解散となったのであろう。実際に解散式の9日後に第三回中央美術社展を三越で開いている。

中央美術社展は第四回が12年6月1日から14日まで竹之臺で、13年に第五回、14年に会友製の中央美術展と改称し第六回（大阪展も行う）、15年に第七回、昭和2年に第八回を東京府美術館で開き、以後府美術館を会場に、第九回を昭和3年に、第十回を4年に開くのである。その後彼の事業関係の影響や世情の変化によるのであろう昭和4年6月に『中央美術』を休刊し、やがて中央美術社が解散するなどあって、展覧会も休止状態だったが、8年に『中央美術』復興、10年に中央美術展を再興し、翌11年5月28日から6月7日までの事実上第十二回展を以て終焉となるまで続くのである。

さて、立ち戻って大正5年金鈴社の自由な創作活動と発表の場の展覧会をプロデュースして美術界に重きをなすようになった掬汀は、大正12年9月1日関東大震災で大打撃を受ける。住居も中心部の本郷から東京郊外の豊島郡長崎村に移るのである。それでもこの年には大正10年に東京美術学校洋画科を卒業していた三男省吾が二科展に初入選の佳事もあった。彼本人も15年(1926)には「東京府美術館嘱託」の任も得た。

だがやはり政治力が必要と考えたのであろう、

15年に市議員に立候補したが当選できなかったのみならず、選挙戦で頑張り過ぎた長男啓一郎は健康を損ね、翌年他界してしまう悲しみに見舞われた。東京美術学校漆工科を卒業し蒔絵の研究に努力していた前途有為の芸術家の長男を失った嘆きの大きさは察するに難くない。

仕事の上でも問題が生じていた。鍋木清方編『日本風俗畫大成』10巻出版の計画である。第一巻は好調に売れ、省吾が昭和3年に仏国留学をする資にもなったが、後の巻が売れず、省吾の 파리滞在中も豊かではなかったという。しかし掬汀は自信があったのであろう、昭和4年12月にその刊行を遂げると、5年に『妖怪大成』の刊行を企画、苦勞の末に第八巻までようやく刊行したが、評価は低く中央美術社は解散したのである。もう56歳を数える段階である。

昭和7年(1932)省吾が帰朝すると、掬汀も三男宅に同居するようになった。そして親友百穂はこの年東京美術学校教授に就任したが、翌8年10月末に兄善蔵の訃報で帰郷中急逝した。掬汀は翌年11月『百穂畫集』を私家版で発行し、「平福百穂遺作展」を府立美術館で行って友情の厚さを示した。更に10年(1935)10月府美術館で「平福穂庵・百穂父子展」を半月以上に亘って催し、天覧の栄まで受けた。中央美術展を終わる前年のことである。

昭和14年(1939)9月に「百穂碑」を故郷角館に建立する。川端龍子が題字を書き、百穂の肖像を省吾が描き、掬汀が撰文したものであり、掬汀個人の力で建てられた。そして何か自らの仕事が終了したとでもいうように、角館の中村政之丞宅で静養することになる。実は肋間神経痛を患い苦しむ状況に追い込まれたのである。

16年(1941)11月、「大東亜戦争」と呼称された太平洋戦争勃発直前という時であるが、夫の看病に疲れたのだといわれているが夫人アキノが亡くなる。本人の故郷における静養生活が尚続いていた戦時下の昭和18年(1943)夏、在京の省吾が中島飛行機荻窪病院に入院していて病状が深刻化した。数えて69歳、当時としては老境に至っている父は、見舞に上京した。だが戦中の長距離列車の旅は若者にとっても疲労に陥る難行であっ

た。病んでいた掬汀は息子と同じ病院に入院する身となった。

入院だけでは済まず、8月9日逝去した。行年69。角館の西覚寺に葬られた。息子も5日後に父のあとを追うことになる。